

Death Education による大学生の生死観の変化

大須賀 恵子*¹⁾ 濱畑 章子*²⁾ 大塚 静香*²⁾

目的：Death Education の講義を受講した大学生の、受講前後の生死観の変容を明らかにして、Death Education の必要性を検討する。

対象と方法：A 大学2005年春学期選択科目「Death Education (講義名；ホスピス概論)」(2 単位30 時間)を受講した72名のうち、研究に同意が得られた68名を対象とした。方法は、提示した課題レポートを質的に内容分析した。

結果：学生達のレポート内容を Death Education の講義前について分析すると、死に対して44名がネガティブな考えや思いを抱き、11名が学習機会の不足による死への漠然とした考えを持っていた。受講後に生死観が変化したと回答した67名について講義後のレポート内容を分析すると、「自身の生き方を見つめる」「死の具現化」「死にまつわる他者との関係性について学ぶ」「死をポジティブに捉え受容する」「自分や家族の死を思考する」などにカテゴリー化された。さらに、命の尊さ、生きることの大切さを思考し、患者側の視点に立った医療のあり方と QOL 向上への援助という現実の問題への対応も考えていた。Death Education の講義によって、ほとんどの学生が生きる意義を再認識したとみられ、自身の生死観を深く、広く、確立するきっかけにもなっていた。

考察および結論：受講後に生死観の変化に気づいた学生に対する今回の Death Education の意味は、学生自身が如何に生き如何に死ぬかを考える機会を与えたことであり、彼らがより充実した人生を送るための支援をすることに繋がる可能性がある。Death Education は、いのちの大切さを学ぶ人間教育の基盤である。学生は受講することによって、死をネガティブなものから死の受容、生きる意味まで学んでいた。本研究では、社会に出て行く前の段階にある大学生に対して Death Education の必要性を示した。

キーワード：Death Education, 大学生, 生死観, 変化

I. 緒言

2009年2月、「おくりびと」が第81回アカデミー賞外国語映画賞を受賞した。近年「終末期」や「死」をテーマにした著書も数多く出版されている。これらのことは、国内外を問わず、社会が死を真摯に捉えようとしていることの一つの表れであるとみることができ

る。「おくりびと」の原作者である青木新門は、日本は「敗戦による終戦とともに、一つの思想体系が崩壊すると

全てが逆転し、とにかく生きることが善であり、死はいかなる形であれ悪とされていく」と述べている¹⁾。戦後の日本は、強さと生産性に価値が置かれ、経済大国に成長した。「強さと生産性が伸びていったのに対して、それと対極にあるのは老いや死である。そこで死がタブー化された」という主張もある²⁾。

このような時代背景のなかで育ってきた学生たちは、死と向き合うことができていたのだろうか。先行研究において大学生は、死をネガティブに捉えている割合が高いとする報告があり、Death Education の必要

* 1) 愛知学院大学心身科学部健康科学科

* 2) 聖隷クリストファー大学看護学部看護学科

(連絡先) 〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12 E-mail: osuka@dpc.agu.ac.jp

性が指摘されている³⁻⁶⁾。得丸は、「わが国の教育では、『生』の側面からの人生へのアプローチは歓迎されているが、逆の死からのアプローチは、特に20世紀後半から死や死にいくことに対する不安や恐れ、タブー、情報・体験不足等により、敬遠されている現状である」と述べている⁷⁾。

本研究では、Death Education 介入による学生の生死観の変容を明らかにし、その必要性について検討した。

II. 対象と方法

対象；A大学選択科目「Death Education（講義名；ホスピス概論）」（2単位30時間）を2005年春学期に受講した2年次学生72名中、研究に同意が得られた者68名を対象とした。

方法；提出させた課題レポートは、講義時間外に作成させた。レポートの初めに講義前後における生死観の変化の有無を選択させた後、「『死』について学習したことの意味」について自由記述形式で記載させた。変化したと回答した67名について、レポートの記述内容を何回も繰り返し読み、死についての考えや思いが述べられている「部分」を抽出し、講義前と講義後についてカテゴリー化した。また、受講後に学生の生死観が変化していった要因を整理した。分析は、3名の共同研究者が同じ方法で分析した結果を比較検討し、分析結果の一致を確認した。

受講者の受講動機については、A大学で2005年7月に実施した授業アンケート結果を参考にした。

「Death Education（講義名；ホスピス概論）」の内容を表1に示した。

倫理的配慮；研究を進めるに当たって、課題レポートを課す際に、研究の目的・内容を十分に説明した。また、研究に同意しなくても成績評価に影響しないこと、参加は自由意思であること、本研究以外には結果を使用しないことなどを含め文書および口頭で説明し、文書にて同意を得た。またA大学におけるヒトを対象とする研究倫理審査委員会によって承認された。

III. 結果

1. 講義前の生死観

講義前の生死観を大きく分けると、44名にネガティブな考えや思いが見られ、11名は死についての学習機会の不足による死への漠然とした考えを持っていた。13名は明確な内容が示されていなかった。

44名の学生たちのネガティブな考えや思いを記述した部分からは102のコードが抽出された。類似のコードを集めて整理すると、5つのカテゴリーに分類された（表2）。「死は怖く悲しく恐ろしく絶望的」「死について考えることを避ける」「死は敗北や喪失」という捉え方が約9割を占めていた。「死は怖く悲しく恐ろしく絶望的なもの」には、死に対する肉体的、精神的な恐怖が表現されていた。「死について考えることを避けていた」には、学生たちの現実の世界に死が存在しないことが表されていたが、実際に死について考える講義は避けたいと考えていた。これは、選択科目であるDeath Educationの受講動機（複数回答）に、26.5%が時間割の都合や単位が取り易そうだったなど回答していた事実と一致し、学生たちは必ずしも関心をもって受講しているわけではなかった。「死は敗北」

表1 講義内容

内 容	コマ数	レポート	教材等
ホスピスの歴史、理念	1	無	資料, OHC
死の過程, 死の徴候, 尊厳死, 安楽死など	1	無	資料, OHC
『ホスピスでむかえる死』を読み感想を書く	7	有*	テキスト
グリーフケア	1	無	論文紹介
子どもの死と高齢者の死	1	無	資料, OHC
教員の体験談「舅を在宅で看取る」	2	無	介護体験資料, PC
本の紹介・新聞記事の紹介など	1	無	資料, OHC
まとめ	1	有*	資料

*大沢周子著『ホスピスで迎える死』, 文藝春秋刊, 2000.

『ホスピスで迎える死』は、7章安らぎのうちに逝った七人の記録で構成されている。講義では、学生たちに1コマ一つの物語をゆっくりと黙読させた後、指定したレポート用紙に感想や自分の考えを自由に記載させ、次の講義時の最初に提出することを課した。

*本研究の分析対象となった課題レポートのタイトルは「『死』について学習したことの意味」

表2 学習前の死に対する捉え方

1. 死は怖く悲しく恐ろしく絶望的なもの	38コード
<ul style="list-style-type: none"> ・人が死ぬ時は痛くて苦しい ・死は、この世で一番恐ろしいもの ・死とは、恐怖、絶望、悲哀、終焉 ・死ぬことは不幸、悲劇、怖い ・生は明るく素晴らしい、死は暗く悲しい 	
2. 死について考えることを避けていた	36コード
<ul style="list-style-type: none"> ・人生の終わりを考えても意味がない ・自分にとっての死は物語の中でしか存在しない ・死は非現実的な問題 ・死は自分には遠い存在 ・自分には関係がないこと ・死について考える講義を受けるのは気が進まなかった ・死を避けて通りたい 	
3. 死は敗北	11コード
<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ長く生きることが自分や周囲にとって重要 ・病気による死は敗北を意味する ・死ぬことはいけないこと ・病院で辛い治療に耐え、変わり果てた姿で死を迎える 	
4. 死は喪失	9コード
<ul style="list-style-type: none"> ・死んだら無になる ・人間をこの世から奪う ・「死」は全ての終わりであり、死後には何もない ・何のためにこの世に死があるのかわからない ・死によって全てを喪失する 	
5. 自分や身近な人の死を受容できない	8コード
<ul style="list-style-type: none"> ・親友の死を受容することができなかった ・曾祖母の死に背を向けた ・祖父の終末期には怖くて病院へ見舞いに行けなかった ・自分が死ぬ、肉親が死ぬことは考えられなかった ・人間はどうせ死ぬのだから、どのような生き方でも良い 	

*N=44について複数抽出

には、死ぬことが人生のマイナスであることが表現されていた。「死は喪失」には、死によってすべてが終わることが表現されていた。「自分や身近な人の死を受容できない」には、過去に経験した親友や親族の死が受け入れられなかったことが表れていた。

11名の学習する機会の不足には、身近な人の死を体験したことがないという理由が多かった。また、周囲の者の死を体験したが、幼かったために死の意味がよく理解できなかった、病院死のために死んだ人と深く関わるができなかったなどが理由にあがっていた。

2. 講義後の生死観

講義後に死に対する考えが変化したと回答した67名の学生について、死についての考えや思いが述べられている部分を分析すると、382にコード化され、10のカテゴリーに分類された(表3)。

「自身の生き方を見つめる」は、最も多い97コードあり、学生たちの多くが死を積極的に考えると同時に生きる意味を見出しながら未来に向かって人生を考えていた。講義での死の学びは、自分の人生の道を示すことであり、今、生きていることの大切さを学ぶことにつながっていた。「死の具現化」(60コード)では、死は誰にでも現実存在する確実なものであり、死ぬことが自然であるという気持ちを表現していた。また、

表3 講義後の死に対する捉え方の変化

1. 自身の生き方を見つめる	97コード
<ul style="list-style-type: none"> ・死ぬまでのプロセスをどのように生きていこうかが重要だと気づいた ・死を学んだことによって、生活の質が高くなり、輝ける自分に近づいた ・死を学ぶことによって、人生の転機に繋がった ・死を学ぶことによって、人間としての幅が広がったように思う ・自分の生きた証、自分の存在の意味を見出したい ・どれだけ生きたかではなく、どのように生きたかが大切 ・自他の死を後悔しないために今何ができるかを考えたとき、生に対する考えにも変化が起こった 	
2. 死の具現化	60コード
<ul style="list-style-type: none"> ・生と死は地球上に存在する全ての生き物に起こること ・死は人生のシナリオの最終章 ・生は長ければ良いというものではない ・死には納得した死と、後悔の残る死がある ・最期に死が訪れることで、人生ははかなくも美しいものになる ・生き方が一人ひとり違うように、死に方も違っている 	
3. 死にまつわる他者との関係性について学ぶ	48コード
<ul style="list-style-type: none"> ・死に逝く本人だけでなく、家族・親戚・知人等周囲の人々の悲しみ辛さを考えるようになった ・一つの命が消えるとき、周囲の人々に大きな影響を与える ・病気で死と闘う患者の周りには、家族を含む患者を支える人々が存在する ・終末期の過ごし方が家族などに与える影響は大きい ・大切なのは、死を独りで背負い込むのではなく、家族などと分かち合うこと 	
4. 死をポジティブに捉え受容する	42コード
<ul style="list-style-type: none"> ・死は患者が苦しみから解放されることでもある ・死をポジティブに考えることができれば、死はそれほど悲しいことではないと気づいた ・死について事前学習をしておけば実際に死に直面した時悔いのない決断ができる ・死を学ぶことは、自然に死を迎えられるように心の準備をすること ・患者が悔いのない最期を迎えるためには、看取る側の準備（知識・精神的）を整えておく必要がある ・告知によって患者・家族が共に死を受容し、痛みを分かち合う方がよいのではないか 	
5. 自分や家族の死を思考する	42コード
<ul style="list-style-type: none"> ・死は今まで怖かったが、講義受講後は「新たに生きる」へと変化した ・死を考えることから逃げないで、死と向き合って考えることが必要だとわかった ・死を学んで「もしかしたら明日はないかも知れない」と思うようになった ・祖父は最期に孫の顔が見たかったのではないかと思った 	
6. 人間の尊厳について思考	38コード
<ul style="list-style-type: none"> ・患者の気持ちを尊重し、その人にとって一番の幸せを重視する ・途中で命を投げ出してはいけない ・人間は誰しも、自分の命を懸命に生きる使命がある ・自殺は、与えられた大切な時間を自ら奪い去ること 	
7. 終末期医療のあり方	34コード
<ul style="list-style-type: none"> ・末期癌患者に対する宗教的な支援は、臨死状態にある人の痛みや苦しみを和らげる ・「生」だけを考えると、人の心身の治療はできない ・死についての恐怖は、死について知ることと痛みの緩和により除去できる ・終末期医療において、患者のQOLを高める援助へと転換が必要 ・終末期にあっても、人は輝かしい生の本能を持ち続けることができる ・ホスピスには、「癒し」や「人と人の繋がり」がある 	
8. 死後の世界を考える	15コード
<ul style="list-style-type: none"> ・死に逝く人々は、死や死に逝くプロセスで遺族に様々なものを遺していく ・死は新しく生まれ変わるための準備 ・死後も人の魂は誰かの心の中で生き続ける 	
9. 家族と死について語る	6コード
<ul style="list-style-type: none"> ・健康な時に家族会議を開き、告知について話し合う ・受講によって、母親と死について話すようになった ・親が「命」「生きる」ことについて、しっかりした考えを持っていて驚いた 	

*生死観が変容したと回答したN=67について複数抽出

人によって死の迎え方が違うことにも言及していた。「死にまつわる他者との関係性について学ぶ」では、死が一人の問題ではなく、周囲の者に多大に影響するものであると考えていた。自分が死ぬという狭小的な現実だけではなく、他者に波及する問題であることを認識していた。特に身近な家族が、闘病や死の迎え方に影響することが強調されていた。「死をポジティブに捉え受容する」では、死ぬことが痛みからの解放であるという意味づけや、死を学習することで死を迎える準備をすることの必要性を指摘していた。「自分や家族の死を思考する」では、自身の死にどのように向き合うのかを考えることの気づきが表されていた。また、身近な者が臨終に希望していたことも推測できていた。

さらに、「人間の尊厳について思考」や「終末期医療のあり方」「死後の世界を考える」においては、死をより深いところで哲学的に思考していた。命の尊さ、生きることの大切さを思考し、患者側の視点に立った医療のあり方と QOL 向上への援助という現実の問題への対応も考えていた。また、数は少なかったが、「死後の世界を考える」では、死後の世界を思考し、「家族と死について語る」では、家族同士が死や告知をオープンに話し合うようになったという変化が表されていた。

IV. 考 察

1. Death Education の必要性

研究対象の68名の学生のうち64.7%が受講前には死をネガティブに捉えていた。また、16.2%の学生が死についての学習機会が不足しているために死を漠然と考えていた。上野は、大学生を対象に実施した調査結果について、死をネガティブに捉える理由として、「死を生と対立する極におき、対立関係において捉えていることと強く密着している」と分析している⁶⁾。このことは、受講前に死をマイナスイメージで捉えていた今回の研究対象者の学生と一致する。しかし、受講前は、死をマイナスイメージで捉えていた学生たちの全てが、受講後「生死観に変化があった」と回答していた。

これらの学生たちのレポートの内容分析では、「自身の生き方を見つめる」「死の具現化」「死にまつわる他者との関係性について学ぶ」「死をポジティブに捉え受容する」「自分や家族の死を思考する」などの変化が示されていた。山折が、生死観とは「人間はいかに生きいかに死ぬか」ということであると述べてい

る⁸⁾ように、多くの学生が「自身の生き方を見つめる」という変化を示し、死を学ぶことによって生を考えることに気がついていった。この中には、受講前に死を漠然としか考えられなかった11名の学生が含まれていたことは、受講したことが生と死について自身の考えを持つきっかけになったと考えられる。

今回の Death Education の意味は、学生自身が如何に生き如何に死ぬかを考える機会を与えことであり、彼らがより充実した人生を送るための支援をすることに繋がったと言えそうである。また学生たちは、死をネガティブなものから、死の受容、生きる意味まで学んだ事実から、Death Education の教育上の効果は十分にあったと推察される。大学生に対する Death Education の教育効果に関する先行研究は、医学⁹⁻¹⁰⁾、看護^{3-5, 11)}、福祉¹²⁾ その他¹³⁻¹⁴⁾ 様々な分野で多角的な報告がされている。本研究では、課題レポートを質的に内容分析することによって、教育効果の中身の検討ができたと考える。

得丸らによる日本の大学生を対象とした調査⁷⁾によれば、身近な人の死の立会経験率は56.3%であり、石田の看護学生を対象に実施した調査³⁾では、身近な人の死の体験率は78.3%、高島の短大生を対象とした調査¹⁵⁾では、身近な人やペットの死の体験率は86.5%であったと報告されている。一般的に考えれば、幼少期から身近な者の死に立ち会うことは死を考えるきっかけになるかもしれない。しかし、今回の学生の記述内容の分析結果から、祖父母の死など身近な人の死の体験やペットの死が即 Death Education にはなり得ていなかった。むしろ、身近な人の死を受容できなかったことが心の傷になり、今もそのことを悔いている記述がいくつも認められた。その理由は、まだ「死」の意味がよく理解できなかった、あるいは病院死であったために看取ることができなかったというものであった。すなわち、学習機会はあっても、それを Death Education として活用できていなければ、かえって子どもの心に深い傷を作ってしまう、成長しても傷が残る可能性がある。子どもが、死を自然なこととして受容できるように伝えていくのは、大人の責任であり、大人が死についてもっと学ばなければならない。このことは社会に出て行く前の段階にある大学生が大人として成熟していくためにも、理論的な Death Education が求められていると考える。

2. 教育における Death Education の位置づけ

図に示したように、いのちの大切さを学ぶことは人

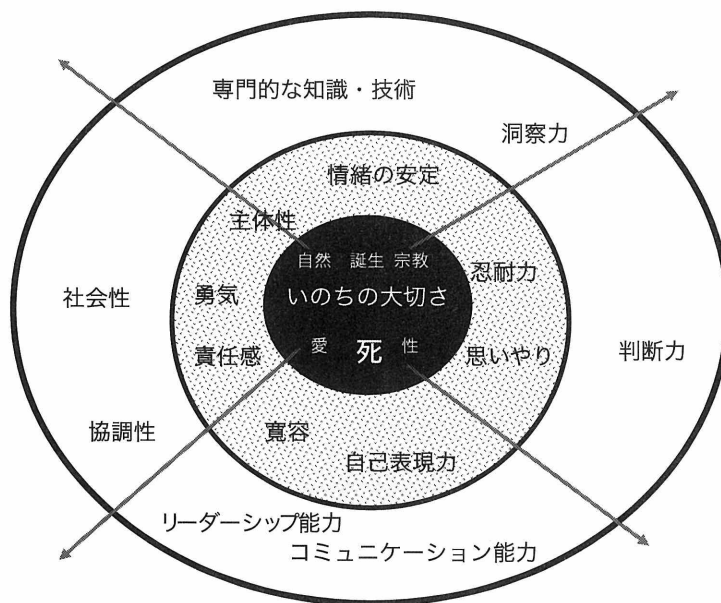


図 教育における Death education の位置づけ

人間教育の基盤（芯）と考えることができる。Death Education は、いのちの大切さを学ぶ教育の一つに位置づけられる。人は、誕生・自然・宗教・愛・性などと同様に「死」によって、いのちの大切さを学ぶことができる。一方、人間としての基盤が確立されていなければ、次の輪の中に位置付けられる、情緒の安定・自己表現力・忍耐力・勇気・思いやり・寛容・責任感などの人間としてバランスの取れた発達が難しくなる。その結果、家庭生活や実社会で必要とされる、図では最も外側の輪の中に位置するところの専門的知識技術・洞察力・社会性・協調性・判断力・リーダーシップ能力・コミュニケーション能力などの発揮に困難が生じる。このように人間教育の基盤が出来上がっていない場合は、社会で自分の力を発揮したいと願っても、個人の意志とは無関係に実現が危うくなるのではないかと考える。

本調査は、Death Education（2単位30時間）の終了近くになって、課題レポートとして実施したものである。これは、講義によって学生たちの死への感情が集中的に盛り上がった時期にあたると考えられ、レポートに記載された死についての考えや思いが講義終了後も継続できるような教育的フォローが課題である。

V. 結 論

本研究に協力の得られた68名の学生の内、約6割

が受講前は「死」をネガティブに捉えていた。また、約2割の学生が死についての学習機会が不足しているために死を漠然と考えていた。これらの学生たちに講義として実施したDeath Educationは、学生に生死観の変化を自覚させ、死を学ぶことを通して自身の生き方を見つめさせていた。また、死をさらに深く哲学的に思考することができるような変化が認められた。これらのことから、現代の若者へのDeath Educationは必要だと考える。

引用文献

- 1) 青木新門（2006）定本 納棺夫日記，桂書房，53，富山。
- 2) 樋口謙一（1995）社会思想的考察としての“死と生”，“東西の死生観”をめぐって，佛教大学総合研究所編，四恩社，192-199，京都府。
- 3) 石田美和（2008）看護学生の死生観構築を目指した教育の一考察，名古屋市立大学人間文化研究科人間文化研究，9，111-126。
- 4) 藤田育子・岩脇陽子（1993）看護学生の死に関する体験と関心についての調査，京府医大医短紀要，3，159-165。
- 5) 藤田育子・岩脇陽子（1995）看護学生の死に関する意識の経時的調査，京府医大医短紀要，5，83-88。
- 6) 上野 轟（1986）死の準備教育の場とそのあり方，死の準備教育（Death Education）第一巻 一死を教える，アルフォンス・デーケン編，メヂカルフレンド社，

- 127-139, 東京.
- 7) 得丸定子・小林輝紀・平 和章・松岡 律 (2006) 日本の大学生における死と死後の不安, 日本家政学会誌, 57 (6), 411-419.
 - 8) 山折哲雄 (2004) 日本の心, 日本人の心 下, 日本放送出版協会, 62, 東京.
 - 9) Pain CH, Aylin P, Taub NA, Botha JL. (1996) Death certification: production and evaluation of a training video. *Med Educ.*, 30 (6), 434-439.
 - 10) Kaye J, Gracely E, Loscalzo G. (1994) Changes in students' attitudes following a course on death and dying: a controlled comparison. *J Cancer Educ.*, 9 (2), 77-81.
 - 11) 志田久美子・山本澄子・渡邊岸子 (2007) 看護基礎教育における「死の準備教育」についての検討—日本における過去10年間の文献研究—, 新潟大学医学部保健学科紀要, 8 (3), 133-141.
 - 12) 松浦弘子 (1997) 学生のための死の準備教育—自己の死を考える—, 四国大学紀要, (A) 8, 107-116.
 - 13) 水野治太郎 (1990) 死の準備教育が意味するもの, 麗澤大学紀要, 50, 113-138.
 - 14) 木村正治 (1990) 大学生を対象にした「死の教育」(Death Education) の実践とその評価, 学校保健研究, 32 (9), 443-450.
 - 15) 高島安代 (2005) 学生の死に関する意識調査, 瀬戸内短期大学紀要, 36, 75-82.

最終版平成21年6月23日受理

Changes in the View of Life and Death in University Students After Attending the Death Education Lecture

Keiko OHSUKA, Akiko HAMAHATA, Sizuka OTSUKA

Abstract

Objective: To investigate the necessity of the Death Education lecture by elucidating the extent to which the view of life and death changes in university students after attending this lecture.

Subjects and Methods: Subjects were 68 of the 72 students who attended the elective subject Death Education (2 credits, 30 hours) in the spring semester of 2005 in “A” university. Qualitative analysis of the assignment reports presented by the students was the method chosen to conduct this study.

Results: Before attending the Death Education lecture, 44 students were shown to have negative thoughts or feelings concerning death and, probably influenced by insufficient learning opportunities, 11 students had a fairly vague idea about death. However, categorized statements such as “gaze at one’s own way of life”, “realization of death”, “learn about relationship with others in view of death”, “accept death positively”, and “reflect on the death of family members and one’s own death” were found in the reports of the 67 students who described changes in their view of life and death after attending the lecture. In addition, students were also found to be concerned about how to act or face the problem of assisting patients in improving their quality of life, providing medical treatment from the viewpoint of the patients and considering the importance of being alive and the worth of life. The Death Education lecture was found to be useful in providing to nearly all students an opportunity to realize again the significance of being alive and to establish their own profound and broad view of life and death.

Discussion and Conclusion: This study revealed that, for those students who became aware of the changes that happened in their view of life and death, the Death Education lecture was meaningful in terms of providing students an opportunity to think on their own life and death, and this experience potentially will enable them to lead full lives. By attending this lecture, students were able to accept death, with no negativity, learning the meaning of being alive. The Death Education lecture is, therefore, the basis of human education, in which the significance of life is learned. In conclusion, the present study indicated that the Death Education lecture is necessary for university students in their final step to integrate into society.

Keywords: Death Education, university students, view of life and death, change